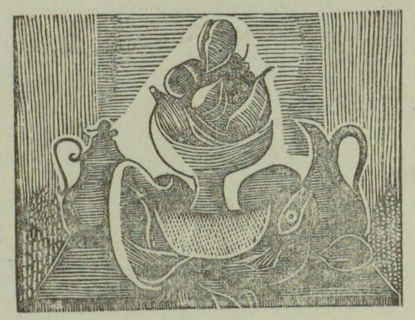
582
8
582-258
1200501522790

帝國圖書館藏

拾遺抒情詩集

昭和五・四・廿七
帝國圖書館

詩情抒遺拾
集雀鳥



東京
第一書房

582-258

わがはたちの歳をかたみせる。

序詩

一つのみ梢に殘れり。
さは一つのみ、實となりて
ふゆぞら烈しきなかに
實となりてぞ殘れる。

引

これらの抒情詩は孰れの詩集にも輯錄されてゐない作品ばかりである。強ひて系統を求めるなれば遠く「抒情小曲集」に根ざしその餘韻を引いてゐる。

これらの詩は二十歳から二十三歳ころまでを生活したものであり、上京迄の可憐な抒情を表はしたものである。京都への旅は二十一

歳、それ以前の海岸生活は二十歳、故郷生活も同じである。

前橋に萩原君をたづねた時の詩が概ね利根川をうたうてゐる。上毛新聞に載せ或ひは手帖に記したまま殘存してゐた。

「創作」「スバル」「地上巡禮」「詩歌」「音樂」「創造」等にこれらの詩を發表したが、今日まで故郷の家の本箱のなかに藏はれてゐたものである。

鳥雀集目次

露霜に

磧……一九
あさ霜……二〇
青冷……二二
旅のかなたに……二四
加茂川……二六
身をよせる……二八
別れ……三〇

冬草……三二
麥頃……三四

鳥雀

肖像……三七
輝ける街路……三八
鳥雀のいとなみ……四〇
靜かなる思ひ……四二
ドアにくる落葉……四四
水の上……四六
ともしびを消せよ……四八
音を怖る……五〇
蝙蝠……五二
ひと朝……五四
いそしみ……五六

冬は來つ……五七
君の名を……五八
哀感……六〇
冬日に……六二
わが名……六四
猫を抱ける夫人……六六
さみしき樹木……六八

アンヘンと云へる娘をうたへる

くちぶえ……七三
心そむけるひと……七四
その手に……七六
白きを愛す……七七
机……七八
片町……七九

知るや知らずや……八〇
氷柱……八一
人とならむに……八二
犀川磧……八三
雪のなかより……八四
犀川越えて……八六
くらがり……八七
雪くらげ……八八
急行列車……九〇
ひと日……九三
唾……九四
足……九八

海べにてうたへる

馬車……一〇三
海……一〇四
海の尼寺……一〇六
冬に入る林……一〇八
七尾の海……一一〇
能登七尾の港……一一二
海べ……一一四

子出河原

氷の奥の春……一一七
往復光路……一一八
南天紅散亂……一二〇
鶏鳴……一二二
蒼天……一二四
赤城野……一二六
白日……一二八

明治四十三年

夏みどり……一三一
扉銘……一三二
都にのぼりて……一三四
日曜……一三六
夜ぞら……一三七
駿河臺の谷間……一三八
さかづき……一四〇
犬……一四一
根津の谷間……一四二
サンドウヰッチマンの上天……一四四
街にて……一四六
心……一四八

露霜に

磧

枯草にふかく坐れる
ひとりのをみなごありて、
ものの本かなしく繙きつ、
何をおもへる景色なるらん。

あさ霜

むらさき野といへるにや
草いろ枯れはてて霜はふり
冬の日の黄なるいろ垂れたり。
われ樹木をゆびさしもすれど
なにものも親しみうつり來らず。
旅とその哀歡のながきつかれより
わが眼はにぶくもつかれ果てたり。
いかにして親しまむと草に坐れども
わが手は冷えたち垂れゆけり。

青冷

加茂川の青冷もわがひたひより
哀しくも曇りそめゆけり。
われはいまあれど明日はえしらず。

明日ははてなきくもり空
くもれる空は雪となり
雪は肌の上につもりたり。

旅のかなたに

わが旅はつくることなく
わが哀しみの消ゆるときなし。
旅にいづればこころよみがへり
あたらしく心勇みいづ。

われみづからの心をしたはしみ
けふも貧しき旅のかなたを指さす。
なまめかしき枯木を裂くごとき
われに山河のうつりくるときの
わがよろこびは唇をあかるくす。

加茂川

加茂川の岸に佇つとき
わが呼吸絶ゆるがごとし。
ましてあさ瀬の蒼きゆらめきに

こころ哀しくとどまり
痛みゆけどもかたみに去りがたし。
きけ、枯草に雀ないてをり
あさのなやみに雀啼いてをり。

身をよせる

わが戀ひしこの古きみやこに
こころ哀しくはぐれゆく。
はぐれむとして哀しみに堪へず。
手をあげて空におもひを傾むけど

空ははるかにうすゆきし
つめたきものをそそがむとす。
何處(いづこ)にゆけどもなじみえず
かへるべくふるさとは又ゆるされず。
しばし身をよすべくは
このみやこあまりにつらく哀しや。

別れ

わがわかれ來る朝も
やどのむすめはさりげなく
いろもあえかに機を織り居り。

やよ、わがわかれくるといふに
機を織り居り。
その織りものの綾目にしのび入り
ながくとどまりあらむとすれど
つれなきうたの身にそはず。

冬草

かなしきひれをうちふり
をみな湯にいればまことに魚のごとし。
その肌はなめらかに泳ぎいで

しめやかになまめきしにほひもす。
されば かの浴場のながれ湯のもとに
冬もあやしく萠ゆるみどりの草ありて
さみしき空にかげをうつせり。

麥頃

なにものをか示さむとしつつ
はげしく匂ふ麥、
麥は空よりさかさまに
みどりの棘を立てそめぬ。

鳥雀（とりすずめ）

肖像

靜けさは病みしがごとく
あけがたの蒼みをふくむわがおもて。
けさみれば銀杏のいただき、
もろ葉枯れしがうへにかかりたり。

輝ける街路

しづかにミルクホールの卓にもたれ
かすかなるねむりよりさめきたる。
つかれにしや、こころものうく
ともすればねむり入らむとせり。
ああ、かすかに眼をあぐれば

雪はおとなくふりつもり
かがやける街路はただ青し。
このふるさとの雪のなかにしも
わが消えさらむとすれども
こころともしびのごとくかなしみ
あたたかき室をいでゆかず。

鳥雀のいとなみ

うれしや空も晴れわたり
みどりのいろもうつりくる。
窓にもたれつつ、そともを戀へども

けふの靜かなるいのちのたほとく
空にこころをゆだねたり。
いと遠く鳥雀のかすかにもしほらしき
いとなみもまた眼にうつり來れ。

靜かなる思ひ

灯もつけずゆふぐれとなり
くらく坐りてなにをおもへるや。
いま哀しみは乳をすすれるごとく
ものしづかにもおとなひきたり
われとなごみ融けゆけり。

やはらかにしてあえかなる絨毯に
とりつつまるごとくもあれば
わが身きえさるごとくはるかなり。
きけ、わがこころの遠きかたより
青き梢はいそしみてのびあがり
鳥雀のすずろなるけはひもす。

ドアにくる落葉

食卓にとり殘されしパン皿は
うす曇りのなかにひかりあり。
ドアもかたく荒れたる野山を閉し
ひと日、室をいでゆかず。
ドアを過ぎゆく風と落葉と

いたましくわがこころにひびき入りたり。
しづかにとりあげしペンはかの
空しきものをつづらむとするものか。
すでにさりたる君をおもはむより
野にいでて土に消え
青くも燃ゆる雪のなか
荒れたる野山にけむり入るべし。

水の上

秋はなすべきことをなしつくし
枯るべきものを枯らしたり

わかねどもそのかげは土にあり。
秋はさあをにすめる水の上
去らむとしてひとくれの緑をも奪ひたり。

ともしびを消せよ

いろあかくともれぬるともしびは
まことまことにわが悲哀なれ。
そのもとにをみなあらむはなにの戯れぞ。

ほそくも燃ゆるともしびの
はるかにながめくらすはさあらねど
ただながるるごとくさわに盛られたる
かの街の灯のなつかしさは何にたとへめや。

音を怖る

なにものに怖るるとなき
ふしぎなる怖れにふるへるとき
つつしみてパイプをはたけど

その音のこころにひびきて痛し。
ふかしぎなる人間の聲のきこゆれば
わが慄ひやまずして眼はすわり
あとなきものをうかがふ。

蝙蝠

かうもりは闇のしたたり、
われの憂へるもののしたたり、
げにかうもりの過ぎゆくとき、
女らの乳ぶさはやぶられ

女ら處女(をとめ)をうしなふ、
かうもり來よ
その翼は闇のひとくれ、
かうもり來よ、
その鋭どきくちばしをもて、
圓き乳ぶさを破りて去れ。

ひと朝

そのいもうとも吉原につとむとや。
ややとしとりしお女郎の
東京こひしと言ひつのる。

旅のひと朝のわかれともなき
かれんにも優しかるをみなご
ましろの肌に雪もふりたり。

いそしみ

臥床のもとに君とあり、
なにごともなくわれらが夜は更け
日は玻璃戸をかすめてのぼる。
われらがながきいそしみと
君とそのすべての夜は更けたり。

冬は來つ

冬は來つ
雪ふり凍てつけり。
ブリキ細工の街なかに
我行き飽きることなし。

君の名を

雪のなかより魚はもえいづ、
青くかなしきはだへには
冬の日のけむれるいろ黄なり。

魚のはだへに君が名を彫り
樹木の呼吸もさみしくきざみたり。
雪にこごえてわれのあれども
わが魚はとほくかへり來ず。

哀感

わが窓を過ぎさらむとして
ふりかへるもののおもてには
なべて忘却のとりどりなるいろあり。

たとへば、をみな衣をぬがむとするときの
こよなくあたたかき哀感にして
やがてましろなる肌もあらはに
わがこころにしたしみうつれるごとし。

冬日に

鳥雀のかなしむごとく
ひとり樹木のもとを去りえず。
冬の日の地上になじむことの
かくばかりにも哀しきことか。
ひえたる手はその樹木を痛み
日はただ卵黄のごとくに沈む。
日は日に新しく
雪にうもれて昇る。

わが名

うつくしき少年の肌を見るとき
われらその肌をねたましとなす。
われらあどけなき少年の日に

わが肌を戀へるやさしき友あり
わが名によりてこよなくいそしみ
街ゆけばつききたる。
いま、わが肌によりて問ふものなく
霜のごとく肌はあれたり。

猫を抱ける夫人

あらゆるものをもて
われをたたふるものなきか。
あらゆるものをもて
わがいのちを奪ひ去るものなきか。

まことに柔らかなる猫をいだける
かのあやしくあでなる夫人こそ
わがいのちを斷つものか。
その手にふるればわがうしろより
わがいのちの削がるるひびきをなす。

さみしき樹木

ひそかに歸り花ほのあをく咲きいづ。
さみしきは樹木のその花をつけむとする
はげしくもいみじきこころなり。

その根ざしふかきをおもひ
うすき日かげにたたずめば
わがこころかすかに目ざめたり。

アンヘンと云へる娘をうたへる

くちぶえ

雪のふるばん雪のなかから
口笛が鳴る。
あんへん、來たぞ。
あんへん、つめたかろ。

心そむけるひと

をみなごをながむるごとに
このひと幸ひならむかを憂ふ。
かかるよしなき我に

をみなごの心叛きて
乾ける口に熱きものを與ふなれ。
心そむけるひとの何んぞ美しき。

その手に

アンヘンの口笛きこゆ。
口笛はまた消えゆく。
アンヘン來たぞ。
アンヘンの指は糊のごとし。

白きを愛す

われひもすがら君の白きを愛す。
まこと妹に見とるるごとく
眞心もてあやしく
われひもすがら君の白きを愛す。

机

薄明のつくえの上に
白き煙のぼれり。
かくても我は身じろがず、
つくえの傍にあるなり。

片町

地べたがひかる。
あんへん、そなたと歩くと
地べたがひかる。
全く光る。

知るや知らずや

冷たきくさに坐れば
アンヘンにおもひうつりゆく。
わが心わづらひて
かた時だにも君がかたへを去らず
アンヘン知るや知らずや。

氷柱

見てあれば
氷柱もけさはとけにけり。
雪かきのけて見れば
春はちいさき腕をくみ
よめ菜のかげにひそみ居り。

人とならむに

君がよめ入らむ日も
もはや我は嘆くまじ、
君がわかさぬすみて
われはいしくも人と爲りゆけり。

犀川磧

あをなる朱なる磧の石は
わが歩みの遠きに敷かれたり。
あをなる朱なる石のあひまに
ふるさとの夏の草いまは埋もれたり。

雪のなかより

日は雪に埋れてのぼる。
われら凍えたる手をかはし
かすかにひかりをあびてあれども

われらが肌はこほりたり。
野にひとくれのみどりなく
われらのみ青く浮き出たり。

犀川越えて

もう雪が來た
どの山見ても燻し銀。
おんみのあかのてぶくろも
そんなに粉雪。
つめたかろ。

くらがり

ものみなに別れさり
ひとり　くらがりにあるは好ましく。
くらがりに住みしづみて
早や年を越えむとす。

雪くらげ

五月の青いいろなみを見せ
めんめんとしてふる雪のなかから
烈しく匂ふくらげのごとき雪の砥の上で
あなたは鋭い猫族の爪を磨ぎ澄ました。
白刃のやうな爪を立て
あなたは私を掻きむしった。

ああ桃のつぼみに毛が生えた、
あなたのはだみに
ゆめのやうにうすい毛が生えた。
そして雲雀の足についた泥の一點が
ことしは屋根で草をそだてた。
あなたの畑に
あなたの手植ゑの人間は
桃のつぼみを食べてゐる。

急行列車

汽車は急行なり
首も千斷るるの急行なり。
森は走り
家は走り
午後の光は走り

山は平らたくなり
河は鳴り
海は鳴り
海氣みなぎり
月出づ。
世界は湧きかへり
世界は戰ひのさなかなり。
林と林ともつれ逢ひ
青田の上に娘は流る。
電線は流れ

われはきちがひになり、
村村の灯はちらちら流れ
星はながれ
われは田舍へ流る、
こひしくなり
はるばるおんまへさまを求め。

ひと日

立てかけし額縁に
さふらんの鉢置かれたり。
かかる優しき靜物を描かむとして
ひねもす在りける我なれ。

唾

あなたを思ふごとに
あなたは白い鴨のやうにせんりつした、
あなたのはだかになられ
あなたの白妙のものが現はれ
あなたにすがりついたときから

われは風邪をひき、
われのはだ身に毛のごときものが生え
そのものは光り
そのものは限りなき喜びをささげた。
あなたはすんなりと立たれ
足もうつくしく立たれた。
あなたの前にあたまが垂れる
あなたの前に

むしけらの眼はつぶれ
悲しみ這へるをみた
あなたの口からくれなゐのものが滴り
あなたの光から言葉が生れた。
われはあなたを舐めまはす
あなたは鴫のやうにいさぎよく
さかんに泳ぎ震はれる
あなたの吐かれる唾を遠くから

伸び上り伸び上り
今は拾ひあつむるために
ながながと舌を吐き
あなたの道ばたに寝る乞食となつた。
日は日をねむらず
雪をもよほす冬近に
ねころび起きぬ乞食となつた。

足

をみなごの足
足
足は五つの光より成る。
日光
いえすのひかり
淫亂

沈默
夜ふかく天に叛く足。

あはれあはれ
人にな告げそ
しろたえのをみなごの足。

あはれ　おんみ此の世にうまれ
ただひとつ持てるものなれば
ありがたく。

海べにてうたへる

馬車

かへり見れば
がらくた馬車のらつぱ鳴る。
らつぱ鳴るにもこころ惹かれぬ。

海

砂山に娼婦あそべり。
あはれなるうたごゑもするごとく。
憂鬱なる松林をつたふ波のむらがり、
ふと眼ざめ、かるくめまひす。

あはれ砂山に娼婦あそべり。
われその蒼ざめたる姿をながめ
人にしあらぬ悲しきものを見る。

海の尼寺

尼寺にたづねゆき、その二階にのぼり
青き日を入れ、ひと日ねむれり。

あはれあえかなりし尼、
わがこころも知らずしてはらみたり。
青草に觸れ、くるしき乳房をいだき
その肌とともにいづことなく去りゆけり。

冬に入る林

かなしくも枯木を焚き
ひとり、冬の林のなかに座す。

枯木の燃ゆる煙は空に消え入り
空はさみしくわが面(おもて)をうつす。

しづかなる地上のかげはつめたく
雪は凍りて梢にあり。

ふるさとの冬はともしびのごとく
あざやかにわがこころに映り
ものうき肌にめざめたり。

七尾の海

自殺したる友がふるさとのこの港、
なぎさをゆけば浪もおとなしく
わがひたひに映りなじみたり。
うれしや雪もうすくふりいで

旅のこころもあたたかに
その友としみらにあゆめるごとし。
ともよ、君がふるさとにながれも來たり、
こころしきりに君をよびさまし
この荒れたる冬にかたらむとす。

能登七尾の港

廢港の夜はかもめさへも啼き出でず、
ともしび山の肌にうつる、
金澤の旅館(やどり)をのがれ

能登のくに七尾に來れど、
何處にゆかむとする我なるかを知らず。
あはれ、うち向ふ夕餉に
いのち斷たれし鷄(くだかけ)のこゑの鋭どし。

海べ

砂丘のたかきによぢのぼり
わが盡くるとなくうたひいづれば
海のとほきより魚むらがれり
われは手をうちふり
哀歡のうたもたからかに沈みゆかむや。

子出河原

氷の奥の春

輝く氷を蹈んで氷の奥へ
暖かく融けがたき氷の繁み。
こぬれ交はして淑やかに
いま春を著けそむる。

往復光路

麥の畑と綠とを見つめくらして
往きくるるまで往きくれよ、
往きくれて何を求めむとするなかれ。
野はただに慈愛なり
慈愛がもてるふるさとなり。
氷のひまより、やがて眺めむとする蒼天、

なやみて走り
氷の上を走りゆけ。
空に日はあり
いさなのごとく青き日はあり、
あめつちはしんじつなり
樹はなみだもて立ちつくす、
われ往きくるるまで往かむかな。

南天紅散亂

霧ふかくして鶫のこころ
わが朝の南天紅をさんらんす。
かくして利根をいつさんに
くいいと叫びつ翅けりゆく。
利根は風より鳴り

手をあげてわれ呼ばふ。
われ、ふたたび
やさしき寂莫の男たらむことを。
ひとり山河荒らきなかに育ちて
われ、ふたたびまなじり上がり
寂莫の男たらむことを願ふ。

鶏鳴

くだかけは光のなかに聲を泳がす、
はや曉けたりしか。
雪の山山、
青々とまぼろしふかく

天いま明けむとす。
われ寢床のなかにすこし蹋りしが
くだかけはふたたび啼き
太陽は寢床のすそをかくやくと
鰭ふりてのぼり行きたり。

蒼天

林はいつさいに芽をつけんとし
ひつそりとして光る。
林をめぐり
身にしみる芽をこよなく愛す

林の上に蒼天はきはまりなくかかりたり、
うれしきは蒼天なり。
命をかけていまははや
息絶ゆるまで山をながむる。

赤城野

野にいま汽車すぎぬ。
ふかきあはれをとどめ。
野に青きを摘み
野にあどけなく

しんとしてわがありしが
ひびきて汽車は過ぎゆきぬ
ああなにといふ
みじめなるものを見するや。
たちまちあたり暗くして
鬱として野にわが叛むきかへるなり。

白日

くもれる空にうごく日は白し
なににかなしみ
我は佇つ。
春はもゆるに
なにかなしみて我は立つ。

明治四十三年

夏みどり

しみじみと
少女雑誌の書きものに
したしみしその夏ころの緑わすれず。

扉銘

さはやかなる五月の朝
えもわかざれども、
われ一個のくだものを手にとりて哀しむ。
こをもつて單なるくだものと言ひはつべきか、

あらず、そは何者かが心よりして、
かのたかき樹上にささげられしものならむ。
みずや
かつ光りなやみつつ
くだものはわがたなそこに烈しく呼吸す。

都にのぼりて

わが手にしたたるものは孤獨なり
身をみやこの熱鬧のなかに置けども
深々として夜はむせべるごとし、

したたるものは孤獨なり
窓を閉して
なにものをか見出さんとするごとく
眼のみいや冴えかへる。

日曜

少年のちんぽこが
哀しや日曜の朝の湯に見ゆ
しづかに浴かりてあれば。

夜ぞら

藍は深くして盛りあがり
東京の夜の空はつねに燃え
つねに低くして赤し、
何ぞやわれのパンの食めざる。

駿河臺の谷間

みやこのそこに
いくつとなく大なる谷間ありて
つねに忘られしごとく
空より限らる。

ゆるやかに舟はゆけども
もやぐべき岸邊をしらず。

われパンと牛酪との包みをもち
夜食の卓につかむとして
暗然として
大なる谷間にかかる。

さかづき

あたらしき草花などなげざしに
卓の上もなめらかにみがき立つれば
ゆゑなくけふもペンをとりたり。

犬

犬はますます輝やけり
永久の地上に砥ぎ澄みて
衝動の不可思議に輝やけり。

根津の谷間

引き摺られ
息窒まりつつ
草のごとく亂せる髪の根もいたみ

指には氷柱垂れ、
風ながれ、
蹌踉としてわれ街を歩めり、
生活の碎片身に刺しとほり街を歩めり。

サンドウキッチマンの上天

神さまはある晩さんどうゐっちまんの青服に
熱いきすをせられた
ものをも食はずにゐたけれど
やきいもはこがねのけぶりを立ててゐた。

それを見ながら河端の石の上で
あたたかな日ざしのなかに
おんがぶきやべいろしやを口ずさみながら
ねむりながら死んだ
しらみは人間をはなれ
そよそよとはるかぜは波の上に。

街にて

これよりなほ
おほいなる苦惱あり
かくおもひ入れども
かうべをあぐることなしがたし。

これよりなほ
おほいなる苦惱あり
ふたたび自らいましめしかど
莊重は狹霧のごとく懸る。
身もほそる苦惱は
次第に知覺を失はんとするごとし。

心

心わづらへる我に
いよいよその心加へて
くらき屋根のあなたより
遠い蛙のこゑの來るなり。

見本

拾遺抒情詩

鳥雀集

昭和五年六月十二日印刷
昭和五年六月十五日發行

千五百部

定價一圓八十錢

著作者　室生犀星

刊行者　長谷川巳之吉

刊行所　東京市麴町區一番町五
第一書房
振替東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷者　白井赫太郎
製本者　橋本久吉

萩原朔太郎著　萩原朔太郎詩集。。。。。。。。。。新菊判總革特製本定價六圓

西條八十著　西條八十詩集。。。。。。。。。。新菊判總革特製本賣切

茅野蕭々譯　リルケ詩抄。。。。。。。。。。新菊判四百頁定價三圓八十錢

三富朽葉遺著　三富朽葉詩集。。。。。。。。。。四六判八百頁定價四圓五十錢

佐藤春夫著　佐藤春夫詩集。。。。。。。。。。四六判二百頁普及版定價一圓

上田敏遺著　上田敏詩集。。。。。。。。。。四六判七百五十頁特製本賣切普及版定價一圓八十錢

三木露風著　三木露風詩集。。。。。。。。。。四六判七百頁定價三圓八十錢

室生犀星著　室生犀星詩集。。。。。。。。。。新菊判三百五十頁定價二圓五十錢

室生犀星著　詩集　鳥雀集。。。。。。。。。。新刊

木下杢太郎著　木下杢太郎詩集。。。。。。。。。。新菊判六百六十頁定價四圓八十錢

田中冬二著　詩集　青い夜道。。。。。。。。。。新菊判和紙二色刷定價二圓五十錢

堀口大學著　堀口大學詩集。。。。。。。。。。新菊判總革特製本定價六圓

堀口大學譯　月下の一群。。。。。。。。。。新四六判總革定價三圓五十錢

堀口大學譯　アポリネエル詩抄。。。。。。。。。。四六判英國製色紙賣切

堀口大學譯　コクトオ詩抄。。。。。。。。。。菊判和紙刷定價二圓八十錢

堀口大學譯　グウルモン詩抄。。。。。。。。。。菊判和紙刷定價二圓八十錢

堀口大學譯　ジヤム詩抄。。。。。。。。。。菊判和紙刷定價二圓八十錢

堀口大學譯　ヴエルレエヌ詩抄。。。。。。。。。。特製賣切普及版定價一圓

堀口大學著　歌集　男ごころ。。。。。。。。。。新三五判挿繪四枚定價一圓五十錢

野口米次郎著　人生詩集。。。。。。。。。。四六判五百頁定價二圓五十錢

野口米次郎著　表象抒情詩集。。。。。。。。。。四六判特製一二三四各冊定價一圓八十錢

野口米次郎譯　ブラウニング詩集。。。。。。。。。。新菊判口繪コロタイプ定價二圓五十錢

野口米次郎譯　ポオ詩集。。。。。。。。。。近刊

582
258